

# 故郷追われる悲哀伝える

## 「クナシリ」続編 根室で撮影

【根室、羅臼】フランス在住でベラルーシ出身の映画監督ウラジーミル・コズロフ氏(66)が、北方領土・国後島のドキュメンタリー映画「クナシリ」の続編「NEMURO」の撮影を根室管内で始めた。主な撮影対象の北方領土元島民の人生と、独裁政権によりベラルーシに帰れない自らを重ね「故郷追放が与える悲哀を表現したい」と語る。日仏などでの2年後の作品公開を目指している。

(川口大地)

## 監督「元島民、自分に重なる」

コズロフ監督は15〜30日の日程で根室管内に滞在。羅臼町沖で17日に行われた洋上慰霊のほか、元島民へのインタビュー、住民のロシア語サークルの様子などを撮影している。

昨年、日本で公開した「クナシリ」は2019年に撮影。ロシア当局が軍事力を誇示する様子や、住民の生活実態、日本との経済交流への期待などを伝えた。コズロフ監督は「国後の撮影

中から対岸の北海道で撮影をしなければと思っていた」。新型コロナウイルスの影響による渡航規制が緩和され、根室での撮影を始めたという。

コズロフ監督は旧ソ連崩壊後の1992年、故郷のベラルーシからフランスに移住。拘束を恐れ、独裁政権下のベラルーシに帰国できない状態だ。「私の人生には故郷からの退去が刻み込まれている。元島民の姿



羅臼町内でドキュメンタリー映画「NEMURO」を撮影するコズロフ監督  
(国政崇撮影)

は自分と重なる」と語る。ロシアによるウクライナ侵攻を機に、ビザなし渡航など北方領土との往来は途絶えた。コズロフ監督は国際問題に翻弄(ほんごう)される住民や行政関係者らも撮影。「『故郷から追放された状況』という不条理を、根室の問題としてだけではなく、日本社会全体に影を落とす課題として描きたい」と話している。

## Article 2

新聞購読・無料おためし



紙面を見る  
おくやみ

北海道新聞 どうしん電子版

2022年10月14日 金曜日 (先負)

ホーム

ニュース

スポーツ

地域

社説・コラム

連載・特集

防災

動画・写真

おで

北海道

新型コロナ

主要

社会

話題

経済

政治

国際

文化・芸能

暮らし

医療・健康

ニュース > 北海道

PR

PR

### 島を追われた人々 思い掘り下げたい 映画「NEMUR O」コズロフ監督インタビュー 国後と根室 両岸から同じ視点で撮影

09/29 13:52 更新



元島民を撮影するコズロフ監督



【根室】北方領土・国後島のドキュメンタリー映画「クナシリ」の続編「NEMUR O」の撮影を根室管内で始めたフランス在住の映画監督ウラジーミル・コズロフ氏（66）が、北海道新聞のインタビューに答えた。コズロフ監督は「国後、根室の両岸から、島を追われた人々の歴史や思いを掘り下げていきたい」と語った。（聞き手・川口大地、松本創一）

一撮影の狙いを教えてください。

「北方領土から追われた日本人についての映画をつくりたいのです。（戦後しばらく四島では）ロシアの人々と日本人は友好的に暮らしていましたが、それを全て政治が壊してしまった。四島では墓地を含む日本のものが破壊されるという悲惨な事態も起きました。第1部のクナシリと第2部のNEMUR O、両岸から同じ視点で描く映画をつくりたいのです」



# 「北方領土は日本 実感」



北方領土について語るコスロフさん(17日、根室市で)

映画「クナシリ」監督

## 根室舞台に続編制作へ

北方領土・国後島の現状を描いたドキュメンタリー映画「クナシリ」を監督した旧ソ連・ペラルーシ出身でフランス在住のウラジミール・コスロフさん(66)が続編「ネムロ」の撮影のため、根室市入りしている。本紙のインタビューに応じ、北方領土に関心を持ったきっかけや国後島を訪れた印象、ウクライナ情勢への思いなどを語った。(聞き手・石原健治)

——「クナシリ」や「ネムロ」を制作しようと思った理由は。  
「ロシア映画の巨匠アレクサンドル・ソクーロフ監督が、2011年に北方4島について『日本の領土で返すべきだ』と発言したことに興味を湧き、国後島を旅したペラルーシの友人からも日本と島の関係を教わった。制作意欲が高まり、国後島に足を踏み入れた。寺などの文化的な痕跡が残

り、日本人が戦前に整備した道路はすばらしかった。ロシア人島民が私に『日本人の文明、文化を破壊してきた』と語ったことがそれを物語っている」  
——ロシア政府は北方領土を自国領としている。  
「ソ連はナチズムに勝利したのと同じ論理で、北方領土を取り戻したと教育した。ロシアとナチス・ドイツがポーランドを侵略、分割したことが、第2次世界大戦をもたらしたという史実があるにもかかわらずだ」  
「北方領土は地理的にも歴史的にも日本の領土であることは明らかだ。そのことを国後島に滞在し、映画『クナシリ』を制作して実感した」  
——続編「ネムロ」の制作スケジュールは。  
「根室市を中心に元島民

らを取材撮影して、予告編を制作している。来年、本編の撮影を行い、上映を目指す。すべては「これからだ」  
——ロシアによるウクライナ侵略をどう思うか。  
「NO MORE WAR! (戦争をやめろ!)」  
◇  
コスロフさんが国後島で

「クナシリ」を撮影したのは、2018年5〜6月。映画では、ロシア人島民が島の生活に不満を漏らし、かつて島で暮らしていた日本人に関する証言なども飛び出す。日本では昨年12月からロングラン上映となったが、ロシアでは封切り早々に上映中止となった。  
は中止が続いている北方墓参に触れ、「ロシア側と交渉し、早期再開をお願いしたい」と要望。国後島出身の古林貞夫さん(83)も「どうか墓参だけでも再開できるように全力を尽くしていただきたい」と訴えた。  
岡田北方相は「針のむしろにいまするような思い。戦争がやまない限り、極めて難しい。ビザなし渡航を再開させることは最優先の課題」と語った。

### 北方相根室視察 元島民らと懇談

岡田北方相が28日、大臣就任後初めて根室市の納沙布岬を視察し、北方領土の元島民らと懇談した。  
岡田北方相は、岬で返還祈念のシンボル像「四島のかけ橋」と「祈りの火」を見つめた後、市内の元島民らと懇談。歯舞群島多楽島出身の河田弘登志さん(88)

## Article 4

NHK NEWS WEB

2022年(令和)

北海道 NEWS WEB

# ベラルーシ出身監督 根室地方舞台の映画制作発表

09月30日 07時01分



北方領土の国後島のドキュメンタリー映画を製作したベラルーシ出身の監督が、根室地方を舞台にした続編を製作することを発表しました。

ベラルーシ出身の映画監督、ウラジーミル・コズロフ氏は29日、根室市で記者会見を開きました。

去年、日本で公開されたドキュメンタ

リー映画「クナシリ」では国後島でロシア軍が演習を行うなど実効支配を強めている現状や、住民の生活ぶりなどを描きました。

そして、この続編として根室地方を舞台にした映画「NEMURO」を製作すると発表しました。

続編では故郷を奪われた北方領土の元島民らの思いを描きたいということで、9月中旬から根室市や羅臼町などで製作準備を行っています。

コズロフ氏は「国後島から最も近い根室で、領土問題を日本人の視点から見ようと思っていた。ウクライナでも起きている痛ましい戦争がなくなるような反戦の映画にしたい」と意気込みを語りました。

また、「ビザなし交流」など北方四島との交流事業が停止されている現状については「ひどいことだ。賢明でない政治によって元島民とロシア人住民の双方が苦悩している」と述べました。

映画「NEMURO」は2024年の完成を目指しているということです。



## Article 5



国後島出身の元島民、久保幸雄さん（右から3人目）ら3世代を取材するウラジーミル・コズロフ監督（左）＝北海道根室市で2022年9月27日（「NEMURO（仮）」製作委員会提供）

北方領土・国後島を舞台にしたドキュメンタリー映画「KOUNACHIR（クナシリ）」を撮影したフランスの映画監督、ウラジーミル・コズロフ氏（66）が来日し、続編映画のパイロット版製作のため北海道根室市などで9月30日まで2週間ロケを行い、元島民ら約10人を撮影した。続編のタイトルは「NEMURO（ネムロ）」で、「順調にいけば2年後には完成させたい」と意気込む。コズロフ監督は「強制送還された元島民の多く暮らす根室を舞台に、反戦を訴える映画にしたい」と撮影の狙いを語った上で、「背景にはウクライナ戦争がある。戦争より怖いものはない」とも話した。「四島交流も（日露の）平和条約交渉も止まった。ひどいことだ」とコズロフ監督は憤りを隠さない。「国後で日本語を教えているロシア人男性は『日本の友人と会えないのがとてもつらい』とメールを送ってきた。賢明でない政治のおかげで、双方（の国民）が苦悩している」とも指摘した。現在はフランス在住のコズロフ監督は、1991年に旧ソ連が崩壊する1週間前に、旧ソ連のベラルーシ

から逃れた過去をもつ。当時35歳。「パスポート更新のため（独裁政権下のベラルーシに）行かなければならないが、戻れるかどうかの保証はない」という微妙な境遇にある。実妹はいまも首都ミンスクに暮らす。「帰りたい。でも帰れない」。それだけに「元島民の心情に重なるのです」と元島民に心を寄せる。 今回の「ネムロ」の撮影では目が不自由な国後島の元島民、久保幸雄さん（87）を取材した。自由訪問で古里に戻った久保さんから「においてと聴覚で古里を感じた」との言葉を引き出した。「元島民の表情を見てみると、（日本語が理解できなくても）感情が湧き出てくるのが分かる」と手応えを語る。元島民の高齢化は著しく、「ここ何年かが最後のチャンス」と考えていたという。パイロット版を製作後、スポンサーを募って資金を集めて来年2月と7月に本編を撮影し、順調に進めば2024年に完成させたいとしている。 戦争をテーマに両国の立場から捉えた映画は、米国のクリント・イーストウッド監督の「父親たちの星条旗」「硫黄島からの手紙」（いずれも06年）が有名だが、コズロフ監督は「そういう作品があるのを知らずに、最初から2本の映画を撮るつもりでいた」と打ち明けた。 そのうえで、北方領土問題について「（ロシアからみると）国後は国境の島で、対岸には強制送還された元島民が多く身を寄せた根室がある。だから続編は根室に暮らす元島民や子孫の視点で撮りたいと思った」と語り、根室海峡をはさんだ両岸から各1本撮ることにこだわったという。 ロシアのウクライナ侵攻後、コズロフ監督は根室に住む親しい友人に「前作にはある種の予言的な要素があり、軍事化、不寛容、侵略など今日のウクライナ侵攻を予見していた」とのメールを送り、来日のチャンスをうかがっていた。 前作の「クナシリ」は13年のロケハン後、18年5～6月に撮影し、19年に完成した。「すぐに『ネムロ』の製作にかかりたかったが、新型コロナの感染拡大で入国がかなわず今日に至った」という。【本間浩昭】

## 元島民通じ反戦訴える

### 旧ソ連出身監督が新作（上）

北方領土の国後島の実情を伝えるドキュメンタリー映画「KUNASHIRI（クナシリ）」をつくった旧ソ連ペラルーシ出身でフランス在住の映画監督、ウラジミール・コスロフさん（66）が9月に来日し、続編の映画「KEMURO（ネムロ）」を制作する作業の一環として北方領土の島民が多く住む根室市などで撮影を行った。コスロフ監督は10月7日の帰国を前に東京で取材に応じ、「北方領土元島民の強制送還があった1946年からの数年間と、ロシアのウクライナ侵攻が続く現在の世界は、実によく似た状況にある。そうした時代の悲劇性を伝え、反戦を訴える映画にしたい」などと新作への抱負を語った。

コスロフ監督はペラルーシの首都モスクワで生まれ、ペラルーシやモスクワの映画スタジオに勤めながら旧ソ連のさまざまな監督のもとで映画制作に携わった。なかでも、ロシアの故エレム・クリモフ監督が第2次世界大戦中にペラルーシで起きたドイツ軍の特殊任務部隊による住民虐殺事件を扱ったドキュメンタリー映画「炎628（ロシア語名「イジー・イ・スマトリー」）」の撮影では、助監督を務めている。その後、ソ連崩壊前後の改革と自由化の流れのなかでフランス人女性と結婚したこともあり、1992年にフランスに移住した。民衆劇場の舞台監督などを務めたあと、2002年から主にドキュメンタリー映画の制作を手がけている。

もともと「世界の果てに関心があった」という。前作の「クナシリ」も知人から、国後島にソ連軍によって壊された日本の村があり、その跡で壊れた墓や、陶器などあらゆる工芸品が見つかることを知らされたことが制作のきっかけとなった。2018年の5月から6月にかけて国後島を訪れて撮影をした作品では、ロシア当局による愛国主義教育が強力に進められる一方で、社会基盤整備の遅れでトイレもない家に住む住民や、日本時代の工芸品など遺物の発掘に努め、その質の高さを称賛する日本愛好者など、島のさまざまな姿が多面的に描かれている。



「根室海峡を隔てた対岸の根室市に住む北方領土の元島民らの話を聞く映画を、すでに撮るつもりでいた」という。だが、「ネムロ」の制作に向けた新たな資金集めや、世界を襲った新型コロナウイルス感染症による渡航制限の緩和までに時間がかかり、「クナシリ」の撮影から4年越しで根室市への訪問がようやく実現した。

その根室市でコスロフ監督が会った北方領土元島民の一人が得能宏さん（88）だ。色丹島出身の得能さんは元島民らでつくる千島舞踊団島居住者連盟（千島連盟）の元根室支部長であり、北方領土での暮らしや島を引き揚げた時の苦勞の語り部も長年務めてきた北方領土返還運動の重鎮だ。色丹島の日本人住民の子供たちと、島を占領したソ連軍人の子女との交流などを描いた2014年の長編アニメ映画「ジョバンニの島」の主人公のモデルでもある。

コスロフ監督も根室に来る前から「ジョバンニ」としての得能さんを知っており、会うのを楽しみにしていた。しかし、実際に得能さんと会ってわかったことは、この極東の地にも容赦なく押し寄せるロシアによるウクライナ侵攻の荒波だった。

得能さんは1992年に始まった北方四島へのビザなし交流事業を通じて色丹島のロシア人住民、イゴリ・トマソンさんと知り合い、家族ぐるみの親密な交流を重ねてきた。色丹島北部の斜古丹にある得能家の墓を守り、清掃などを続けるトマソンさんを「得能さんは「ロシア人の息子」と呼ぶ。

ところが、コロナ禍から北方四島へのビザなし交流事業が2019年を最後に途絶えたうえ、今年2月からのウクライナ侵攻を契機にロシア外務省はビザなし交流そのものの停止を日本側に通告した。こうした状況下で得能さんもトマソンさんとの連絡が取りにくくなっていったところ、ロシアのプーチン大統領がウクライナでの苦戦を背景に9月21日に部分的動員令を出した。その直後に根室で会うことになったコスロフ監督に得能さんは、「いま北方領土では皆が兵隊にとられている。色丹島のロシア人の息子、トマソンにも召集令状がこないかと、とても心配だ。でも動員が始まったばかりで状況がわからず、連絡もとれない」と、胸中の苦悩を切々と訴えたという。

「1945年の終戦から47年ごろにかけて北方領土の島々では、得能さんのように日本人とロシア人が一緒によい関係を築いて暮らしたケースもあった。戦後77年のいまも得能さんは故郷の島のロシア人の息子と交流に努めているが、それがウクライナでの新しい戦争が引き裂く。地球上で戦争ほど恐ろしいものはない。だからこそ新作の『ネムロ』は、戦争の持つ悲劇性を訴える反戦のドキュメンタリー映画としていきたい」。得能さんとの出会いを受け、コスロフ監督は語っている。

得能さんによると、監督に会ってから間もなく、ロシアのサハリ州在住の知り合いを介して色丹島のトマソンさんから「私はもう50歳を過ぎたから兵隊にとられる心配はない」との連絡があり、ひとまず胸をなでおろしているという。



# 心揺る元島民の思い 旧ソ連出身監督が新作(下)

北方領土の元島民らが故郷に寄せる思いを描くドキュメンタリー映画「NEMURO(ネムロ)」の制作に乗り出した旧ソ連ペラルシ出身でフランス在住の映画監督、ウラジーミル・コスロフさん(66)は、根室市を中心に元島民やその家族などの話を聞いたほか、9月17日に羅臼町の沖合で行われた元島民らの洋上慰霊にも同行、目前の国後島に向かって祈る姿を撮影した。

「旧ソ連のたとえばロシアでは海に花を投げて慰霊をするが、元島民らは手を合わせてじっと祈っていた。その違いがとても興味深かった」とコスロフ監督は語る。一方でロシアによるウクライナへの軍事侵攻が鋭く折々あり、「慰霊をした中間ライン付近の海域には近く日本の巡視船の姿が見えた。ロシアが実効支配する国後島の方からロシアの艦船が現れるはないかと、不安も感じた」とも振り返る。

現在のウクライナでは、住民に対する集団虐殺の疑いや市街地へのミサイル攻撃などロシア軍のさまざまな蛮行が伝えられている。コスロフ監督も、北方領土の国後島の実情を描いた前作「KONKORER(クナシリ)」の制作を通じて知り合った国後島のロシア人住民から、ウクライナ侵攻を契機に大きく変わった生活について情報を得ているようだ。

監督が「クナシリ」撮影のために国後島に入った2018年当時、ロシア国内で治安と防諜活動を担当する連邦保安庁(FSB)の許可を受けていたので、島でのロシア人住民の取材などには何の支障もなかった。しかし、「クナシリ」の中で日本人が住んでいた場所で発掘を行い、出てきた日本製の工芸品などの質をほめていたミハイール・ルキヤノフ氏はいま、



恒常的にFSBの監視下にある。

また、同じく「クナシリ」に登場する魚類学者のゲオルギー・クリンスキー氏はビザなし交流での日本語学習に何度も参加した日本通で、2021年8月に日本への亡命を希望して国後島から根室海峡を泳いで標津町にたどり着いたワース・フェニクス・ノカルド氏にも日本語を教えた人物だ。だが、すでにノカルド氏が日本に渡った時点で尋問のためにFSBに呼び出され、その後もルキヤノフ氏と同様に監視下にあり、「ビザなし交流も停止され、日本人と会えないのがとてもつらい」とメールを送ってきているという。「現在のロシアでは、外国に友好的なものは外国のスパイとして扱われるからだ」と監督は胸を痛める。

北方領土の元島民からも監督は、島を占領した旧ソ連軍部隊による日本人住民への過酷な扱いを聞いた。「神社を荒らし、そこにあった色のついた布からロシア人の女性用の服をつくってしまう。地面に穴を開け、周りを木材で囲っただけのロシア風トイレをつくるのだが、寒い冬にろくな暖房がない。それで住民がトイレから木材を薪にして燃やすために持ち去るので穴だけが残る。日本人の妻が用を足す時は、夫が周りを隠すなど苦労をした。子どもが何人もこのトイレの穴に落ち、おぼれ死んだとも聞いた」と監督はいう。

監督が根室市で会った国後島の元島民、久保幸雄さん(87)も島を占領した旧ソ連軍によって過酷な運命を強いられた一人だ。久保さんは国後島最南端のケラムイ岬の出身だが、島にいた8歳の時に失明し、島を追われた後に住んだ根室市でマッサーン師として生計を立ててきた。1992年にビザなし交流が始まると、早々に息子の浩昭さん(54)とともにケラムイ岬を訪れたものの、生家の跡には何も残っていなかった。それでも「音においからは、はっきりと古里を感じる事ができた」と語る幸雄さんの感動を、コスロフ監督も共有できたという。生家跡訪問の様子は浩昭さんがビデオカメラで撮影したが、「せひ「ネムロ」でも、この時の幸雄さんの映像を使いたい」と監督は望んでいる。

久保家では、浩昭さんからも長年手掛けている戦前にケラムイ岬と根室市の間を結んだ海底ケーブルと根室市に残るその陸揚庫の保存運動や、「将来、国後島間に海底ケーブルを復活させてロシア人住民と交流をしたい」という希望を聞いた。また幸雄さんの孫で根室高校北方領土根室研究会の会長を務める歩夢さん(17)からは、「国後島でもロシア人住民は3世代を数え、島を古里とする人たちが育ってきている。将来、島で日本人とロシア人が共生することが領土問題解決の唯一の方法ではないか」との若い世代らしい考えに接することができた。

さらに根室市では、歯舞群島の多楽島出身で千島歯舞諸島居住者連盟(千島連盟)の副理事長を務める河田弘登志さん(88)から、ソ連軍の将校に「根室に渡って勉強しろ」と諭されて島を脱出した経緯や領土返還運動の歩みなどを聞いた。金刀比羅神社の高台から朗々と故郷に伝わるという「多楽音頭」を歌い上げる河田さんの声にも、心を揺さぶられた。「元島民の平均年齢はすでに88歳だ。初めての訪問でさまざまな経験や意見を聞くことができて本当によかった」とコスロフ監督は手こたえを語る。今回の撮影をもとに来年1月にまずは映画のパイロット版を作成、秋には再来日して本編の撮影に入り、順調に進めば2024年の公開を目指している。



# Article 8

ひと  
2023

ロシアが実効支配する北方領土や、隣接する北海道を舞台にしたドキュメンタリー映画を製作する。かつてソ連に強制退去させられた元島民にもインタビュー。「望まずに故郷を離れる人たちは今も世界中にいる。悲しい歴史を繰り返さないために、反戦を訴える映画にしたい」と語る。

ペラルーシの現在の首都ミンスクでソ連時代に生まれた。映画製作会社に勤めたが、ソ連崩壊で経済が混乱に陥り仕事は激減。1992年にフランスへ移住して劇団で活動し、2002年以降は監督としてドキュメンタリーづくりを重ねた。

国後島を訪れた友人の話がきっかけで北方領土のロシア人社会や帰属問題に関心を抱いた。現地に足を運び、かつて日本人が暮らした集落跡や、インフラが十分に整っていないロシア人島民の生活の実態などをフィルムに収め、19年に映画「クナシ

北方領土をテーマに映画を製作する

## ウラジーミル・コズロフさん

リ」を公開。フランスやロシアのほか、日本各地でも上映された。

「日本人側から見た四島への思いを撮りたい」。続編の撮影のため22年に根室市などを訪問。「11歳まで住んでいたが今も帰れない」「島に孫と行き、自分が住んでいた場所を直接教えたい」。インタビューした元島民の言葉には、故郷への変わらぬ愛着があふれていた。

島がソ連に占拠された78年前と、ロシアが侵攻するウクライナで多くの避難民が出ている現状が重なる。「政治の犠牲になるのはいつも市民ということを知ってもらいたい」。新作は「NEMURO」と題し24年に完成予定。66歳。

(共同)

